

社会との共生



車いすフェンシングとは？

車いすフェンシングは、「ピスト」と呼ばれる装置に固定した競技用車いすに座り、上半身だけを使って行う競技です。相手を剣で突くとポイントになるなどのルールは、立って行うフェンシングとほぼ同じですが、座ったままで競技し、フットワークがないだけに、剣さばきのテクニックやスピードが勝敗を分けることとなります。

車いすフェンシングは、1960年の第1回ローマパラリンピックからの正式競技種目で、ヨーロッパで盛んな障がい者スポーツの一つです。日本では、2000年シドニー、2004

年アテネ、2008年北京の各パラリンピックに代表選手を送り出しており、東京2020パラリンピックでのメダル獲得を目指し、全国から選手が集まっています。

【種目】

フルーレ：メタルジャケットを着た胴体だけの突き
エペ：上半身の突き
サーブル：メタルジャケットを着た上半身の突きと斬り

【クラス分け】

カテゴリーA：腹筋があり、十分な座位バランスがある
カテゴリーB：腹筋がなく、座位バランスがない

当社と車いすフェンシングとの関わり方

クルマを扱う当社は、SDGsのGoal3に掲げられた、交通事故のない安心・安全な社会の実現を重要な使命と考えています。車載器の開発や自動車学校と提携した実車教習プログラムの提供など、本業を通じて「交通事故ゼロ」を目指しています。

またこの取り組みと並行して、事故や病気など、さまざまな理由で車いすを利用している方へのサポートをするため、2017年より「NPO法人日本車いすフェンシング協会」とゴールドパートナー契約を締結しています。当社では金銭面でのサポートに加え、社員を大会運営の競技ボランティ

アとして育成、派遣するといった支援も行っています。車いすフェンシング選手と競技ボランティアとして関わることで、社員のボランティア活動に対する意識向上につながっています。



車いすフェンシングとの関わりを通じて、障がいにかかわらず、誰もがイキイキと活躍できる共生社会の実現を引き続き目指してまいります。

共生社会の実現に向けてSMASが果たす役割とは

パラアスリート、特に海外から参戦するトップアスリートとの接点など今まで全くなかった私は、「本当に役に立てるのだろうか」という不安を抱きながら、2018年に開催された「ワールドカップ京都大会」にボランティアとして参加しました。

大会会場ではそんな不安を感じる暇もなく16のピストを飛び回り、国籍や性別に関係なくアスリートごとの好みを身振り手振りで確認しながら車いすをセット。カタコトの日本語で「アリガト」「サイコー!」と感謝の言葉をかけられたとき、改めて自分の役割が実感できました。

東京2020パラリンピックは延期となりましたが、大会のField Cast(ボランティア)として、約50名の有志社員とともに世界のトップパラアスリートの活躍を全力でサポートしたいと思っています。



執行役員
営業推進本部副本部長
(前：経営企画部長)
藤川 忠志